

Roman Books

昭和39年 3月10日 第1刷発行

末っ子物語

¥ 200

著 者 尾 崎 一 雄

発行者 野 間 省 一

印刷所 豊国印刷株式会社
(製本大製)

発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽丁3ノ19

電話東京(942) 1111 (大代表)

振 替 東 京 3 9 3 0

©

尾崎一雄 一九六四

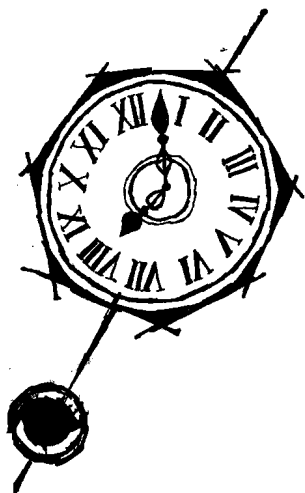
(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)



Roman Books

末っ子物語

尾崎 一雄



Roman Books

装
幀
石
垣
好
晴

末っ子物語

1

五月下旬のある朝、多木太一夫婦が裏庭で、雨あがりのいきいきとした木や草を眺めながら、声高に話している。彼らを囲む木や草には、朝日を受けた水玉が、無数にきらめき、ゆれている。

「ラジオの天気予報が当たったね」

「当りましたね」

「この頃、俺の天気予報はまるで駄目だ」

「そう言えばそうね」

「二、三年前までは正確だったのに」

多木太一はそう言うのと、さわやかに晴れた空をふりあいだ。彼は戦争末期病気になり、長い東京生活を切り上げて、療養のため一家を挙げて郷里なる湘南地方の田舎町へ引込んだのだが、その病気が全快したと言っていい現在も、郷里の家を離れようとはしない。「東京はここ

りっぱくて——」なぞと言っているが、実際のところは、めまぐるしい大都会のあけくれに耐えるだけの体力と気力とを失ってしまったのかも知れない。

三年ほど前までは、彼の胸に巢喰う神経痛という病気が、正確な天気予報をしてくれた。雨の来る半日位前になると、きまってそこがうずき出すのである。

「ラジオはあんなことを言っているが、今夜あたり天気は崩れるよ」

そして、その通りになった。だから、細君や子供たちは、よく彼に明日の天気を訊ねたものだが、その予報能力を、今の彼はうしなっている。肋間神経痛という予報技師が、彼を見捨ててしまったのである。

「君は知るまいが、ゆうべの雨の降り出したのは一時頃だ。相当の雨量だったぜ」

「知ってます。樋に落葉がつまったせいか、水の落ちる音がひどいの。仕事師の英三さんでも頼まなくちゃあ」

「それなんだ。早速屋根の掃除をやろう。あの音をききながらそう思ったくせに、天気になると忘れる。よし、直ぐ始める」

物置のハメにかけてある梯子をかつぎ出し、屋根にかけた。

「未だ瓦が濡れてやしませんか。すべると大変ですよ」

「もう乾いてるさ。——草帯木をとってくれ」

「英三さんに頼んだ方がいいと思うけどなア——おっこったら、もうそれっきりですよ」

「大丈夫。任しとけ」

多木は、相手にせずと言った調子で言い放つと、梯子に手をかけた。彼は今五十五歳、つとめ人なら定年という齡だ。その上長い病牀生活から足腰が弱っている。だから、細君が心配するのの一応はもつともとうなずきはするものの、それだけに一方では「バカにするな」という反撥心をそそられる。

多木が、草蓆木を腰にはさみ、梯子を二、三段昇ったとき、丁度そこに面した窓の戸がガラリと開くと同時に、疝高い叫びが飛び出した。

「お父さん！ 駄目ですよ。そんなカルハズミ、止して下さい！」

あまり突然だったので、多木はびっくりし、足がすくんでしまった。

2

「おどかすなよ、圭ちゃん」

「おどかしたんじゃないやしません。屋根へのぼるのをとめたんです」

「そうかい。圭ちゃんに心配かけちゃ悪いから、止めとこうか」

多木は苦笑と共に梯子から降りた。

「丁度よかったわ。早く顔を洗って御飯たべなさい。起そうと思ってたとこなの」と細君が言う。

「はい」

「梯子騒動のおかげで、今朝は自発的に起きたというわけか。感心だね」

「だって、二人とも大きな声なんですもの、寝てなんか居られやしない。いつもより十分早く起きて損しちゃった」

「気の毒したな」

三十分ほど経って、圭子は元氣よく家を出た。中学校までは約二キロ、歩いて二十五分はかかる。

多木たちの長女と長男とは、共に大学生で、東京の知人宅にそれぞれ寄寓しているから、この田舎町の家は、目下三人暮らしである。したがって末の圭子は、このところ一人っ子と同じ有様で、大いに羽根をのばしている。

圭子が登校したあとは、まるで颱風一過というあんばいだ。圭子の世話に手をとられるから、細君はまだ食事の途中である。坐り直して、さアこれからゆっくりといったふうな細君を眺めながら、多木は食後の煙草をふかしている。

「お父さん、カルハズミは止して下さい、と怒鳴られたのには驚ろいた。カルハズミなんて、

舌を噛みそうな言葉が、あの際よくスラスラと言えたもんだ」

「あなたが屋根からすってんころりと落ちたら大変と、圭子も一生懸命だったんですよ」

「それにしてもさ。——何だか滑稽だな。カルハズミ、か。ハッハッハッ」

多木は喫いさしの煙草をもみ消すと、さて、と立上って、

「予定通り、屋根へのぼる。鬼の居ぬ間に洗濯、という恰好だけだね」

「本当に気をつけて下さい」

「大丈夫」

多木は、何の苦もなく屋根のてっぺんに上った。そして四方を見渡した。約四キロの南に、相模湾が、空の青さをうつして美しくひろがっている。白い波がしらのチラチラする海岸線、その手前を東西に走る旧東海道の松並木、さては海上四十キロのあなたに、ぼんやり浮ぶ伊豆大島……。

目を西に転ずると、伊豆半島から北へ箱根、足柄とつづく山なみを前景に、富士山がそびえている。雨上りだからだろう、この季節としては珍らしく澄み透った大気の中に、くっきりとその秀麗な輪郭をくぎっている。

多木太一は、（いつ見ても悪くない眺めだ）と、桶の掃除なぞ忘れて、屋根のてっぺんに突立っている。（こんな良い景色が眺められるのに、いくらすすめても屋根にのぼろうとしない

あいつはどうかしている」と、肚の中で細君に小言を言うのだった。

3

いい気持であたりの景色に眺め入っていた多木太一は、「大丈夫ですか？」という細君の声でわれに返った。

「ひどい落葉だ。落葉というと秋を思いがちだが、常磐木は春から夏にかけて葉を落とすんだな。樋がつまる筈だ」

「葉が落ちてもいいけど、あなたが落ちるのは困りますよ」

もうそれには応えず、多木は仕事にとりかかった。足もとに注意しながらあちこちと移動して、屋根瓦の上の木の葉を掃き落とす。樋に落ちたまった奴は、掃木では間に合わぬから手でかき落とす。簡単に済むと思った仕事は、案外手間どった。樋の端から豎管への落ち口に木の葉がつまっているのを掃木の柄でつつき落としながら、（これでは水がばしゃばしゃ落ちるのは当たり前だ）と肚の中でぶつくさ言っていると、不意に、

「今日は」と声がかかった。見下ろすと、合服をキチンと着けた四十位の男が、手に小さなカバンをぶら下げて、笑いながら見上げている。誰なのかよく判らなかった。

「屋根のお掃除ですか」

「ええ」とあいまいに応えると、向うから、

「おハガキを有難うございました。ピアノを見に参りました」と言った。

「あ」と気がついて、

「おーい、お客さんだよ」と怒鳴った。「はーい」と、どこかで返事がした。

多木は、丁度いいので屋根の上の散歩を切り上げることにし、梯子に近寄った。そして、梯子に片足をかけたとき、他の足くびをくねらせた。ちょっと痛かったが、別に障りはなく地上に下り立つことができた。

手や足を洗って、ヴェランダへ行ってみると、ピアノの調律師はもう仕事にかかっていた。すでに三度ほど来てくれたことのある人だと判った。

「ご苦労さまです。新しい割にはよく調子が狂うが、どういうわけかしら？」

「あまりお使いにならないのではありませんか？」

調律師は仕事の手を休めずに言った。

「あまり使わないと狂いますか」

「適当に使って頂かないと……」

「なるほど——そうですか」

多木は、茶をいれている細君の方を向いた。細君も、多木と同じことを感じたらしく、こっ

ちを向いた。そして両方一緒に笑い出した。

「適当にというと、どの位弾けばよろしいんでしょうか」細君が笑いながら訊ねた。

「まあ一日に、最低三十分ぐらいは使って頂きませんか……」

「三十分ですか。判りました。娘にそう言つて、これからは必ず三十分ずつ練習させることに致します。もう、まるで怠けているんですから」

「こうして拝見すれば、大抵判りますのです」

調律師は、軽く笑つた。

4

やがて仕事を終えた調律師を送り出すと、多木夫婦はそのままヴェランダに居坐つて、茶をすすつた。

「この頃は、先生のところへも行かないし、うちでも減多に練習しませんからね。ピアノが狂う筈ですよ」

「うちにピアノがあれば習うと言つたから、無理算段をして買ってやつたんだ。——いつ頃から始めたんだったかね」

「中学に入つた年ですよ。もういい加減弾けていい筈なのに——あなた少しやかましく言つて

下さらくちやア」

「よし、今日帰ったら、ハッパをかけてやろう」

そんなことを言いながら、多木は右足くびに鈍痛を感じていた。ためしに力を入れてみると、足くびがキュッと痛んだので思わず顔をしかめると、細君が、

「どうかしたんですか？」と見とがめた。

「さっき屋根から下りるとき、右足くびをちょっと捻ったんだ。軽い捻挫を起したらしい」

「いやですねエ」

「大したことはない」

「圭子には内緒ね」

「そうだ。カルハズミをするからです、なんて威張られてしまう」

「でも、大丈夫ですか？ 冷やしましょうか」

「それほどのことはない」

答えながら、多木は可笑しくなった。これでは、中学生の娘に威張られても仕方がない、と思った。——人間は老年になると筋骨共に弾力をうしない、骨折や捻挫を起しやすいものです、なんて講義をするだろう、全くその通りだから、こっちも諸事注意しているつもりだが、今日は、うっかりしてしまった。足くびを痛めたことは、芳枝のいう通りあの子には内緒にし

ておこう。それより、ピアノの練習はどうした、と小言を言ってやる必要がある。始めてから二年何ヵ月になるわけだが、どうやら普通にやっていたのは一年ぐらいで、あとは何の彼のと、一週一度の稽古日をさぼる。この頃では、うちでもピアノには滅多に手を触れなくなつた。あまり使わないからピアノの調子が狂うのだ、とは初耳で、こっちも驚ろいたが、圭子だつて驚ろくだろう。今日はとちめてやることにしよう——多木は、次女の大きな身体や子供っぽい顔かたちを憶い描きながらそんなことを肚の中でぶつぶつ言っていたが、勿論娘に腹を立てているわけではない、反対に、なんとはなし面白がつているあんばいなのだ。

——あなたは圭子をあまやかしすぎます、だからあの子はのほほんとして、まるで大名みたいに勝手なことを言つてばかり——などと多木は時々細君から言われる。細君のその不平にも多木は、大体同感なのだ。そのくせ、圭子のやり口に呆れ返っている細君の様子が、多木にとっては面白くもあるのだつた。

5

多木太一の足くびの捻挫は、大したことはなかったが、歩くとやはり痛んだ。どうしても足をかばうので、足に故障のあることが、誰の目にも判る歩き方になってしまう。その痛みは、午後になつてもおさまらなかつた。